

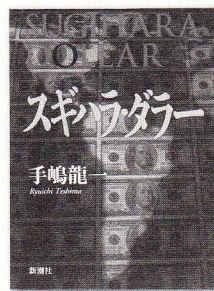
この本はこう読む①

杉原千畝と現代マネー市場を結ぶ インテリジェンスの深淵

『スギハラ・ダラー』

手嶋龍一著

新潮社 1680円(税込)



手嶋龍一(てしま・りゅういち)
外交ジャーナリスト、作家。
1949年、北海道生まれ。NHKワシントン特派員として冷戦の終焉に立ち会い、『たそがれゆく日米同盟』『外交敗戦』(ともに新潮文庫)を発表。またワシントン支局長時代は、9・11テロの際11日間不眠不休で中継放送を受け持つ。2005年に独立し、翌年インテリジェンス小説『ウルトラ・ダラー』がベストセラー。

アンドレイ・フリスクの命そのものでした

著者が語ったところによれば、シカゴのくだりも、市場を閉じなかつた理由も、事実なのだという。ここが、手嶋龍一の小説の「肝」である。

「事実」、それも自身一流のインテリジェンス・マスターである氏が収集した「ピース」

を、小説の中にそれとなく配置する。小説という「偽」の世界に、「真」を挟み込むのだ。もちろん、微妙に背景やエピソードは変更されており、読者に「真偽」はわからない。

それも、ただ「事実」を羅列するのではない。著者は少なくとも、ここに2つの意味を持たせる。

ひとつは、情報に対する氏の「哲学」の表明だ。氏は小説に仮託してインテリジェンスを使いこなせなかつた大国の現実を皮肉る。例えばアメリカ。真珠湾攻撃も、9・11

も、情報はあがっていたのに、それを見ようとしなかつた。例えば日本。ソ連の対日参戦情報を確実に掴んでいたにも

かわらず、自分の都合の悪い情報は、受け取らなかつたことにして、破棄した。

もうひとつは「予言」だ。

氏は、自身の収集したピースを並べ替えながら、来るべき未来を占わんとする。それはあたかも、私たち読者が、探偵役であるステイブン・ブラッドレー(英国秘密情報部員)を通して、物語の謎「マーケットの暴落の裏に隠された陰謀を追う」とシンクロするかのようだ。

その予言とは? 例えば、登場人物のひとりに、氏はこう語らせる。

〈向こう四年のうちに、人民元はかならず変動相場制に移行する。〉(中略) 来年の末までには(中国で)株価指数の先物取引が始まると僕は見ている

インテリジェンスの深淵に触れた私たち読者は、氏の紡いだ小説が現実なのか、自分たちが見てきたものが現実なのか、しばしば錯覚に襲われる。作り物とは断定できない物語世界に、圧倒されてしまっているからだ。

本書の前作ともいえる『ウルトラ・ダラー』がベストセラーになった理由も、本書『スギハラ・ダラー』に興奮してしまふ理由も、おそらくここにあるのだろう。

だった。

杉原千畝を動かす方法はたった一つ。

「チウネ・スギハラは、あくまでインテリジェンス・オフィサーだ。それゆえ、独ソ双方の動きを探った、とびつきのインテリジェンスにならず、必ず触手を伸ばしてくる」

ポーランド秘密情報部は、ビザ発給と情報との交換を画策し、インテリジェンスの逸材をアシスタントとして送り込む。目論見はあたった。杉原はビザを発給し続け、多くのユダヤ人の命を救った。

そしてその中に、少年アンドレイと少女ソフィー——本書の主人公とも呼ぶべき2人が含まれていた。彼らはシベリア鉄道で大陸を横断し、神戸へとたどり着いていた。

戦前、リトアニアの日本領事館領事代理だった外交官・杉原千畝は、ドイツに占領されたポーランドから逃げ込んできたユダヤ人約6000人に、ビザを発給する。東洋のシンドラーと呼ばれる杉原の行為は、今でも戦時中の美談として取り上げられる。

ところが、元NHKワシントン支局長として、情報戦争——いわゆるインテリジェンスの中に身を置いてきた著者手嶋龍一氏は、この美談の「裏側」を、小説『スギハラ・ダラー』の中で、こんなふうを描いてみせる。

〈日本への通過査証を発行してもらおう際、チウネ・スギハラには金など決め手にならない〉
これがポーランド側の判断